

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 1 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720136

研究課題名（和文） 延辺朝鮮語の音声学的・音韻論的研究

研究課題名（英文） Phonological and phonetic study of Yanbian Korean

研究代表者

伊藤 智ゆき (ITO CHIYUKI)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号：20361735

研究成果の概要（和文）：本研究では、現代朝鮮語諸方言のうち、中国吉林省延辺朝鮮族自治州で話されている延辺朝鮮語について、固有語名詞（単純語・複合語）、漢字語、借用語を中心に約 20,000 語の語彙収集を行い、また発話の録音を行った。更に、収集した資料に基づき、固有語複合語名詞の濃音化に関する研究、喉音特徴（平音・濃音・激音）や基本母音の世代差・個人差・性差に関する音響音声学的研究、借用語アクセント（英語および植民地時代の日本語からの借用語、現代中国語北京方言からの借用語）に関する音韻論的研究を行った。

研究成果の概要（英文）：In this project, I conducted various phonological and phonetic studies of Yanbian Korean (spoken in north-eastern China), based on the data of c. 20,000 words (mainly native simplex and complex words, Sino-Korean words, loanwords) which was collected by the author through consulting with native speakers. Concrete research topics include: variation study on tensification phenomena in native complex words; sociophonetic study on the three-way laryngeal contrast and the vowel system; loanword accentuation study with a weighted constraints analysis.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2009 年度 | 244,255 | 73,277 | 317,532 |
| 2010 年度 | 1,655,745 | 496,723 | 2,152,468 |
| 2011 年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学，音韻論

キーワード：延辺朝鮮語，音声学，音韻論，アクセント，歴史言語学，借用語

1. 研究開始当初の背景

筆者が研究開始当初までに行ってきた研究は、主として朝鮮語の共時・通時音韻論に関するものである。たとえば、朝鮮漢字音研究（中国語からの一種の借用音である漢字音が、朝鮮においてどのように受容され、体系化されていったか検討したもの。『朝鮮漢字音研究』（2007）、汲古書院。2008 年第 36 回金田一京助博士記念賞受賞）、朝鮮語真言・

陀羅尼音の研究（伊藤 2007b）、15～16 世紀中期朝鮮語アクセント・イントネーション研究（伊藤 2004, 2002b）、約 5,000 語の見出し語からなる中期朝鮮語のアクセント辞典作成（2004-2005 年度科研費若手研究（B）「中期朝鮮語アクセント辞典作成」による）、などがある。また一方で、生成音韻論的研究、統計学的分析、音声解析ソフトウェアを用いた音声分析等、新しい方法論と分析手法に基

づいた研究も行ってきた。たとえば、現代朝鮮語標準語の音素配列論に関する統計学的研究 (Ito 2007), 借用語研究 (日本語→朝鮮語借用語等, Ito, Kang & Kenstowicz 2006), 現代朝鮮語方言アクセント研究 (Ito 2008, to appear) などである。

このようなことを背景に、本研究では、現代朝鮮語諸方言のうち、これまでに十分な記述研究が行われてきていない延辺朝鮮語 (中国吉林省延辺朝鮮族自治州) について、徹底的な語彙調査を行う一方、中期朝鮮語 (上記筆者作成の中期朝鮮語アクセント辞典に基づく) と比較した上での通時的音韻研究を行うことで、筆者のこれまでの研究成果を更に統合的に発展させることを目的とし、研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究では、現代朝鮮語諸方言のうち、中国吉林省延辺朝鮮族自治州で話されている延辺朝鮮語について、世代差・個人差等のバリエーション/可変値を調べるのに十分な人数の話者を対象に、徹底的な語彙調査・共時的記述研究と音韻論的・音声学的分析を行う一方、中期朝鮮語 (筆者作成の中期朝鮮語アクセント辞典に基づく) と比較した上での通時的音韻研究を行うことで、筆者がこれまで行ってきた諸研究成果 (朝鮮漢字音研究, 中期朝鮮語研究, 借用語研究, アクセント研究等) を更に統合的に発展させることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 延辺朝鮮語語彙調査の実施・収集データに基づく音韻論的研究の遂行

延辺朝鮮語の語彙調査を実施する。調査に際しては、アクセント情報も記録する。また適宜、該当項目の方言形や異形態があるかどうか確認する。インフォーマントは原則として日本在住の延辺朝鮮語母語話者とする。随時、リニア PCM レコーダーによる調査語彙全項目の録音 (44.1kHz, 16 ビットの WAV ファイル) も行う。

更に、収集したデータに基づき、延辺朝鮮語の様々な音韻論的トピックについて、研究を進める。研究の性質上、データにおいてかなりのバリエーションが見られることが予想されるため、分析結果について、必要な統計処理を行う (ロジスティック回帰分析等)。

(2) 延辺朝鮮語の音響音声学的研究

延辺朝鮮語の子音・母音の基本的な音響音声学的特質を調べるため、可能な限り多くの話者を対象に、延辺朝鮮語語彙 100 語程度について、リニア PCM レコーダーにより録音し、録音した音声ファイルを Praat (Boersma & Weenink 2004) などの音声解析ソフトで分析

する。更に、分析結果を統計学的に検証する (分散分析, t 検定等)。

4. 研究成果

(1) 延辺朝鮮語の語彙収集

インフォーマント調査を通し、固有語名詞 (単純語・複合語の 1~7 音節語), 漢字語 (1・2 音節語), 借用語 (英語等欧米諸言語からの借用語・日本語からの借用語・現代中国語北京方言からの借用語) を対象として、約 20,000 語の語彙収集を行った。調査対象話者は語種により 5 名~10 名程度で、年代は 20 代前半~40 代を中心とし、アクセント、活用パターン、話者による使用頻度判断などについても詳細に記録した。調査語彙は一覧表の形にまとめ、各語のハングル形、アルファベット転写、音節数、語種、語構造、日本語訳、英語訳、中期朝鮮語形等を記載した。中期朝鮮語アクセントが判明している語については、重点的に多くの話者からデータを収集し、その通時的発展について検討を行った。また、日本語借用語については、植民地時代に借用された語彙だけでなく、日本在住歴のある延辺朝鮮語話者だけが使用する、現代日本語からの借用語が存在することをつきとめ、それら資料についても収集を行った。現在、これらの資料について、語彙集としての公刊準備を進めている所である。

また、調査に際し、語彙の録音も随時行った。内容は、固有語単純名詞の単独形と、複数の活用形 (主格・対格・属格など)、固有語複合名詞の一部、借用語の一部であり、複数名の話者から録音を得た。

(2) 複合語濃音化研究

固有語+固有語からなる約 1,200 語の複合語を対象に、話者 37 名分のデータを収集した。データは、基本的に話者自身の内省に基づいているが、その正当性について随時確認を行った。また収集したデータについて、話者間の違いが一覧できるよう、簡潔な表にまとめた。

一般的に朝鮮語複合語では、後部要素の頭子音が平音 (Lax) である場合、それが濃音 (Tense) へと交替することがあるが、その生起条件は音韻論的に予測できないとされている。しかし筆者は、収集したデータに基づき、延辺朝鮮語複合語においては、音節数・前部要素末子音・共起子音等、複数の音韻論的条件が濃音化に関わっていることを明らかにし、それを統計学的に証明した。また、濃音化比率は使用頻度とも相関関係があることを実証した。

更に、架空の複合語を作成し、話者が後部要素を濃音・平音のどちらで読むか、実験を行った (ワグテスト)。それにより、実在の

複合語に見られる共起制限が架空の語彙においても作用していることを示した。(この研究成果は、国際学会 (TEAL-7) にて発表済である。)

(3) 延辺朝鮮語の音響音声学的研究

延辺朝鮮語頭子音(平音・激音・濃音)の発音パターンが、世代・性差などによりどのように異なるかを調べるため、1935~1992年生まれの話者61人を対象に、約50語の調査項目(/p/, /t/, /k/, /p^h/, /t^h/, /k^h/, /p*/, /t*/, /k*/)を頭子音に持つ語彙で、第一音節の音調が低調のもの(と高調のもの)の録音を行い、Praat (Boersma & Weenink 2011)を用いて音響音声学的分析を行った。その結果、VOTが若年層においては全体的に短くなっていること、F0値と頭子音との相関性において性差が見られること(男性においては、他方言と同様、激音・濃音が高いピッチで現れる傾向があるが、女性においては、濃音に続く母音のピッチが低下する傾向が見られる)、voice qualityにおいて世代による変動が見られることなどを明らかにした。全体としては、若い女性が最も革新的な特徴を見せるのに対し、老年層の男性が最も保守的な特徴を示しており、社会言語学研究において一般的に指摘される傾向と同様の現象を見いだすことができた。(この研究成果は、日本音声学会研究例会にて発表済である。)

また、基本母音が世代・性差などによりどのように異なっているかについても調査を行った。1935~1992年生まれの話者51人について、基本8母音のデータ(約50語)を収集し、やはりPraatを用いて音響音声学的分析を行った。その結果、前舌母音の /e/ と /ɛ/ が、若年層においても区別はされているが、老年層に比べ相互の位置(F1, F2)が近付いていること、他方言と違い、後舌母音の /o/ と /ɔ/ が非常に近接しており、話者によっては合流も見られること、中舌母音の /ɔ/ が、若年層になるにつれF2値が上昇(前舌化)していることなどを明らかにした。これらの点は、/o/ と /u/ が合流しつつあるソウル方言や、/ɔ/ と /ɛ/ が合流している慶尚道方言などとは違っており、興味深い結果と言える。

(4) 延辺朝鮮語借用語(英語等欧米諸言語および植民地時代の日本語からの借用語)アクセントに関する研究

収集した資料に基づき、借用語(英語等欧米諸言語および植民地時代の日本語からの借用語)アクセントパターンに関する研究を進めた。それにより、延辺朝鮮語借用語のアクセントは、末尾2音節の音節量(syllable weight)、音節数、挿入母音の位置等が主要因となって決定されるが、語末アクセントをデ

フォルトとする固有語と違い、次末音節にアクセントが置かれるのがデフォルトであることを示した。固有語・漢字語と借用語との間で、アクセント付与の基本的パターンが異なっていることを示すため、固有語・漢字語の収集資料にも基づき、アクセント分布の差を統計学的に証明した。

また、英語借用語(強勢→ピッチアクセントの借用)・日本語借用語(ピッチアクセント→ピッチアクセントの借用)・中国語借用語(声調→ピッチアクセントの借用)の3種を比較し、借用語アクセントパターンは、これまで先行研究で指摘されているような、受容言語の文法や、普遍文法に基づくものではなく、借用の元となる言語の文法と語彙タイプの使用頻度に基づくことを明らかにした。(この研究成果は、Natural Language & Linguistic Theory にて公刊予定である。)

(5) 現代中国語北京方言からの借用語研究

現代中国語北京方言から延辺朝鮮語への借用語語彙を約200語ほど収集し、その音韻論的特質について研究を進めた。それにより、現代北京方言からの借用語に現れるアクセントは、非常に規則的に、末尾2音節に現れる中国語声調の組み合わせにより決まり、その際に反映しているものは、次末音節と最終音節との間の渡り部分における音調の上昇/下降であることを解明した。(この研究成果は、韓国の学術誌 Language Research での共著論文として発表済である。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

Ito, Chiyuki & Michael Kenstowicz. (2009). Mandarin Loanwords in Yanbian Korean II: Tones. Language Research 45.1, 査読有, 85-109.

[学会発表] (計4件)

- ① Ito, Chiyuki, "A Sociophonetic Study of the Ternary Laryngeal Contrast in Yanbian Korean", 日本音声学会第324回研究例会, 2012年3月17日, 愛知淑徳大学.
- ② Ito, Chiyuki, "Emergence of the OCP: A case study of compound tensification in Yanbian Korean", 筑波音声学・音韻論セミナー, 2012年3月13日, 筑波大学筑波キャンパス.
- ③ Ito, Chiyuki, "Emergence of the OCP: A case study of compound tensification in Yanbian Korean", The 7th International Workshop on

Theoretical East Asian Linguistics (TEAL-7),
2012年2月18日-19日,広島大学.

- ④ Ito, Chiyuki, “Mandarin Loanwords in
Yanbian Korean: Tones”, 日本音韻論学会
2009年度春期研究発表会, 2009年6月19
日, 大東文化大学.

[その他]
ホームページ等

<http://www.krling.com/>
<http://www.chiyukit.sakura.ne.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 智ゆき (ITO CHIYUKI)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文
化研究所・准教授

研究者番号：20361735